

## 安息日



## はじめに

「百貨店主と呼ばれたジョン・ワナメーカーはあるとき、伝道者ビリー・サンデーを案内して、自分の所有する大きな百貨店を見せ、こう言いました。『この店のものものならば、何でもお好みにしたがって差し上げます』。しかしビリー・サンデーの求めたものは、『この世界最大のデパートの所有者の友情』でした。

今、多くの人々がモノを求めて、この世界にモノよりも尊いものがあることを忘れていきます。この世界を所有し、人を愛しておられる神の友情は人間の求め得る最高のものです。

あなたの選択は、あなたの生涯を決定するばかりでなく、家庭の幸福、社会の将来、国家の運命を決定するものとなります。今日、私たちの生活をきよめ、社会を救うのはイエス・キリストの福音よ

り他はありません。この救いの福音こそ、今日の全世界にあるすべての問題に対して完全な解決を与えるものです。たとえ困難があるようにみえても、神に従う道は喜びに満ちたものであり、その彼方には永遠の希望と神の栄光が輝いています」  
(山形俊夫)。

この通信講座は、キリスト教の背景のない人々のために山形俊夫博士によって著されたキリスト教入門書『真理への道』(福音社)を通信講座用に編集したものです。1952年(昭和27年)に発行された名著が65年ぶりに通信講座となつてよみがえりました。この通信講座を学ぶ皆様、イエス・キリストにある恵みと救いの福音に触れることができるようにお祈りいたします。

### この講座を勉強する方へ

- ・もしお持ちであれば、聖書を手元に置いて学びをはじめてください。
- ・最初に本編をお読みください。
- ・設問用紙は真ん中のページにあります。ホッチキスを外すか、コピーしてください。
- ・設問用紙に答えを記入し、郵送・FAXなどでご返送ください。
- ・添削した設問用紙と次のテキストをお送りします。
- ・その他、具体的なことは、担当者にお問い合わせください。



# 安息日



聖書の初めの2章は、この世界と人間の創造の記録です。神が理想的におつくりになったこの世界の初めに、2つの制度が定められました。これは人間が罪を犯す前に与えられたもので、人間が本当に幸福な生活を続けるためでした。その一つは結婚の制度です。男女が完全に、人格的に結合する喜びの経験であるこの制度の意味と正しい考え方が示されました。もう一つの制度は、安息日という特別な日が定められたことです。

## 週制度

私たちはいろいろな時の区切りを用いています。1日、1週、1年などです。これらの時の区切りは、たいいてい天体の現象を元として定めたもので、地球の自転の周期から1日、公転（地球が太陽のまわりを1回転する動き）の周期

から1年が定められています。しかし1週、すなわち7日間という時の区切りはどこからきたものでしょうか。7日という周期を持った現象は自然界には見当たりませんが、週制度は非常に古くから用いられています。大英百科事典のカレンダーの項を見ると、7日という時の単位は、太古の時代からほとんどすべての東洋諸国において用いられ、東洋から西洋に広がっていったと書いてあります。

人類の発祥地と考えられているチグリス川、ユーフラテス川流域のメソポタミヤ地域に、人類の最も古い文化と制度が見いだされませんが、その中にすでに週制度が存在しています。この時代の東洋民族はほとんど滅び去ってしまいましたが、はっきり残っているのはユダヤ民族です。この民族を、この時代と現代をつなぐ鎖とみなす

ことができます。

ことに便利なのはユダヤ民族は、古代民族のうちで、他と比較にならないほど、正確な歴史的記録を持つていることです。それは旧約聖書です。考古学の発達に伴い、旧約聖書の歴史性が正確であることは、今日では一般に認められるようになりました。

この旧約聖書の中に7日という時の単位及び週という言葉が出ています。旧約聖書はヘブル語で書かれています、ヘブル語の週という言葉は7を意味する語根からきたものです。このことから、週と7との関係がうかがわれます。創世記2章1、2節には、「こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた」と書かれています。すなわち

7日という周期は、天地創造の期間にその基礎を置くものです。ユダヤの学識深いラビたちも、

このことを証言しています。また、先に引用した大英百科事典のカレンダーの項には次のように述べられています。「週とは7日間の周期を指し、それに不変の一樣性を与えるような天体の運動はない。

……それは太古の時代から、ほとんどすべての東洋の諸国において用いられた。これは1年または1か月の何分の一というようなところからきたものではないから、デランバーも指摘しているように、もしモーセの物語（旧約聖書の創造の記事）を認めない者はその起源について確からしく思われる説明をすることに困難を感じるであろう」

このようにして始まった週制度

の第7日は聖書によれば特別な日でした。「神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである」（創世記2章3節）。

「聖別する」というのは「それが聖なることと宣言し、聖なる目的のために用いるようにとっておく」という意味です。すなわち神は1週の第7日を、創造のわざを記念して聖別されたのです。この考えは十戒の中にさらに明瞭に示されています。「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、なんのわざもしてはならない。あなたもあなたのむすこ、娘、しもべ、はしため、家畜、またあなたの門のうちにいる他国の人もそうである。主は六日のう

## 安息日の過ごし方

聖書によれば1日は日没から始まります。週の最初の日は、土曜日の夜から始まります。安息日は、金曜日の日没から始まり、土曜日の日没に終わります。1週間の歩みは、この安息日に向けて整えられると言っても過言ではありません。安息日は、私たちが神様と集中的に交わることができるように聖別されているのです。

私たちの日常生活の中心に神を礼拝する安息日はすえられています。1週間の生活が、この安息日の祝福に向かってすべて整えられていることを自覚しながら毎日を送りましょう。

聖書によると、安息日は、金曜日の日没に始まります。聖書を信じる多くのクリスチャンは、その時を賛美と祈りのうちに聖書を読みながら迎えます。土曜日の朝は、教会の集まりに出席します。そこでクリスチャンの仲間と共に聖書を学び、礼拝説教を通して神のみ声に耳を傾けます。

午後は、日常の活動を離れて信徒の同胞と共に、神のみ言葉を学んだり、隣人への奉仕に生きながら、神のみ言葉とみ業を集中的に体験します。そして、土曜日の夕方には、感謝と祈りのうちに日没を迎え、新しい1週間へと歩み始めるのです。

私たちが、自らの日常の働きを中止して、安息日の休みを手にするようにとの神の招きに応じて創造主であり<sup>あがな</sup>主である神に1日24時間を<sup>ささ</sup>捧げるとき、私たちは、神こそが私たちの救いの完成者であるとの信仰を、自ら告白し実践しているのです。

(『基礎講座11』より)

ちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた」(出エジプト記20章8〜11節)。

もし人間が創造のとき以来、第7日をおぼえて、これを聖別していたら、この世界には、無神論者は1人もいなかったでしょう。神をおぼえることが現代のすべての問題に解決を与えるとするならば、このような信仰のない唯物的な時代に、安息日は特に注目される必要のある重要な制度なのです。

### 週制度の継続

この週制度が創世以来、今日まで続いてきたことについて、イタリアの天文学者ジー・スキアパレルリは、『旧約の天文学』という著書の中で、「安息日の間隔は中断されることなく連続的に行われ

たことは疑うことができない」と言っています。

またキリストはすべてのことにおいて私たちの模範ですから、イエスが当時守られた安息日は、創世以来の変わらない循環を保ってきた第7日であったと信じることができます。したがって週制度の継続を確かめるには、キリストの時代から、現在に至るまでの変遷を調べればよいわけです。

まず日の勘定が飛んだり、重複したりしたとは考えられません。少数の人々には思い違いがあるかもしれませんが、全人類がそのような誤りに陥ることは考えられません。また天文学者という、日時の勘定を専門の仕事としている人もいます。

もう一つの懸念は、こよみ暦の改訂にあたって、週日に変化はなかったかということ。キリスト以

後、暦の改訂が行われたのは、1582年の1回だけです。この改訂前の暦は、ユリウス暦で、改訂後の暦は、この改訂を指導したローマ法王グレゴリウス13世の名をとってグレゴリオ暦と呼ばれています。これが今日私たちが用いている暦です。

ユリウス暦においては、1年を365日と4分の1と考えていましたが、実際には約11分14秒ほどの誤差がありました。このために16世紀後半のグレゴリウスの時代には、季節より暦日れきじつが10日ずれてきて、太陽が春分点を通過する(春分日)のが3月21日ではなく、3月11日になってしまったのです。この不都合を解消するために、改暦が必要となりました。

改暦の要点は、暦日を季節にあわせることと、将来このようなことが起こらないように閏うるふを入れる

## 【設問用紙の送り方】

- ・設問用紙に解答、名前、性別、住所など必要事項を明記の上、設問用紙のホッチキスを外すか、コピーやスキャンなどをしてご返送ください。

### ※郵便で送る場合

- ・市販の封筒、またはテキストに同封して送られてくる返信封筒で、次の宛先までお送りください。

〒 241-8501 横浜市旭区上川井町 846  
VOP バイブルスクール 行

1 課ずつではなく、一緒に送られてきた複数課の設問用紙をまとめてお送りいただいで結構です。

### ※ FAX で送る場合

- ・郵送同様、必要事項をご記入の上、解答面を間違わないように次の番号まで送信してください。

FAX 番号：045-921-2319

- ・設問用紙に、名前などの必要事項を明記いただければ、別紙（FAX 送付状）をつけていただく必要はありません。

### ※ E メールで送る場合

- ・解答面をスキャンするなどして、PDF または JPEG データでお送りください。内容が読み取れるか送信前にご確認ください。件名に「真理への道答案」と必ず明記してください。

アドレス：info@vopjapan.net

送信後、担当者から受信メールをお送りします。休日を除き72時間以内にメールが来ない場合は、受信できていない可能性がありますので、ご確認ください。

- ★どの方法で解答を返送していただいても、添削した設問用紙と次のテキストは郵送いたします。

ご意見、ご感想をお聞かせください。

フリガナ お名前	登録番号
ご住所 〒   電話番号 (            )	



# 第 16 課

VOPバイブルスクール  
真理への道講座・設問用紙

**質問 1** 週制度についての正しい説明は、どれですか。

- 日、月、年と同じように、天体の運行に基づいている
- 聖書の天地創造の記録によらなければ確かな説明はできない
- メソポタミアで自然に発祥した制度である

**質問 2** 安息日についての最初の記事は、聖書のどこに書かれていますか。

- 出エジプト記 20 章 8～11 節
- 申命記 5 章 6～21 節
- 創世記 2 章 1～3 節

**質問 3** 週制度の継続について正しく述べているのは、次のどれですか。

- 1752 年に暦の改訂がなされたため、週の日々の順序は一度途切れてしまった
- 1752 年の暦の改訂では、曜日の変更はしなかったため、週制度の継続は歴史を通して崩れることはなかった
- どこかで、日の勘定が飛んだり、重複することはありうるため、厳密には週のサイクルは途絶えなかったとはいえない

**質問 4** 神はどのような目的のために、安息日を設けられましたか。

- 礼拝のため、神との交わりのため。また、神と人に奉仕するため
- 自分勝手な生活をしないよう制限するため
- 労働から一日解放して休ませるため

# 16

規則を定めることでした。このとき、さまざまな改訂案が出ましたが、カトリック百科事典9巻251ページによると、週制度を廃するという考えは全く出なかったのです。

この百科事典の8巻740ページにこのときの改訂方法について記載されています。「キリスト教時代においては、1週の日の順序が決して途切れていないことは、注目すべきことである。グレゴリウス13世が1582年に改暦を行ったときは、10月4日木曜日の次を10月15日金曜日としたのである。英国においては、1752年に、9月2日水曜日の次を9月14日木曜日とした」

法王グレゴリウス13世の布告によって、スペイン、ポルトガル、イタリアでは直ちに改暦が行われましたが、主として宗教的軋轢あつれきの

ために、他の国々は、直ちにこれに従いませんでした。英国では1752年までユリウス暦を使用しました。開始時期は異なりますが、他の国々でもグレゴリオ暦を採用するようになりました。したがって週制度は創世以来、今日に至るまで変わることなく続いてきたことは明らかです。

さて、聖書の中で言われている第7日が、土曜日にあたることはどうしてわかるでしょうか。

イエスの復活が、日曜日であったことについては異論がありません。そこで、イエスの復活についての聖書の記録を調べてみると、ルカによる福音書23章の終わりに、イエスが十字架にかかれたあと、そのからだをアリマタヤのヨセフの助力で、まだだれも葬ったことのない墓におさめた記事がありま

す。54節から56節に、「この日は準備の日であって、安息日が始まりかけていた。イエスと一緒にガラリヤからきた女たちは、あとについてきて、その墓を見、またイエスのからだを納められる様子を見とどけた。そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ」とあり、それにつづいて24章1節から3節に、「週の初めの日、夜明け前に、女たちは用意しておいた香料を携えて、墓に行った。ところが、石が墓からころがしてあるので、中にはいつてみると、主イエスのからだが見当らなかつた」という復活の記事があります。

復活の日は現在の日曜日にあたるのですから、イエスの時代に、「おきてに従った安息日」というのは「週の初めの日」の前の日、すなわち、週の終わりの日、第7

日の安息日で、これが現在の土曜日にあたることは明らかです。

次に聖書以外の歴史的な証拠を少し調べてみましょう。聖書では日に特別な名前はなく、第1、第2……と数で呼んでいて第6日は準備の日、第7日は安息日と呼んでいました。日月火水木金土という名前は、古代バビロンの占星術から起こったものと思われまます。その当時、太陽系の惑星の中でよく知られていたのは、土星、木星、火星、太陽、金星、水星、月で、これらは世界を支配する神々であると考えられていました。1日24時間、1時間ごとに順番に支配し、その日の第1時間を支配する神は、その日の主であると考えられました。そして、その惑星の名前をその日の名前としたのです。一般的な順序は、土星が最高位で、土木火日金水月の順序でした。

そこで、今、土星が一日の第1時間にあたっている日と考えると、この日の24時間は、(1)土、(2)木、(3)火、(4)日、(5)金……(23)木、(24)火となり、その次の日の第1時間は太陽(日)の支配する時間となり、その日は太陽の日となります。これを繰り返していくと、土日月火水木金という週の曜日の順序が出てきます。

聖書の第7日が、この占星術からきた土曜日にあたることは、いろいろな歴史的文献が示しています。その二、三を挙げてみましょう。

1世紀から2世紀にかけての歴史家タキトウス(55頃〜120頃)は、ユダヤ民族の起源を土星の神と結びつけ、そのために土星の日に休むと言っています。このユダヤ人の起源の考えは、伝説的

なものです。安息日を土星の日と結びつけているのは、ユダヤ人が守っていた聖書の第7日の安息日が週の土星の日、すなわち、土曜日にあたっていることを示しています。

アレキサンドリヤのクレメンス(150頃〜215頃)は、その当時盛んであったグノーシス派の人々について、「彼らは第4日と準備の日の意味を知っていた。前者は水星の神、後者は金星の神より名づけられた日であった」と言っています。これは聖書の週の第4日が水曜日に、また6日の準備の日が金曜日にあたっていたことを示しますから、第7日は土曜日にあたっていたことになりました。

ラバヌス・マウルス(776〜856)はドイツのマインツの大僧正で、その時代の最も教養の深

い人と考えられています。彼は次のように言いました。「彼（法王シルベステル1世）は昔からの習慣に従って第1日を主の日と呼んだ。その日は初めに光が送られた日であり、またキリストの復活が祝われた日であった」

これは聖書の週の第1日が日曜日にあたることを示しています。このほかユダヤ人の伝えた週の第7日が、週の土曜日にあたることを示す文献はいろいろあります。

#### 安息日の宗教的意義

十戒は神が人間にお与えになった生活の原則です。その中の4つは、神に対する人間の義務を定めています。第1条において人間の礼拝の対象、第2条において礼拝の真の様式、第3条は礼拝にのぞむ適当な態度、第4条は礼拝のための特別な時を示しています。

信仰経験の中核をなすのは、神との交わりです。神は礼拝のため、また神との交わりのために特別な日を設けてくださいました。もちろんいつでも私たちは神と交わることができませんが、安息日は特別な意味で、神が人間に交わりを与えてくださる日です。

また安息日は神のため、人のために奉仕をする日です。そして安息日を守ることは、神の民のしるしであると教えられています。

「しかしキリスト教の礼拝日は日曜ではありませんか」と言われる方がおられるかもしれません。事実、現在では多くのクリスチャンは日曜日を守っています。日曜日を特別な日とするさまざまな神学的理由が挙げられています。聖書的な根拠はありません。

カトリック教会の機関紙のひとつ、『カトリック・ミラー』

1893年9月23日号には、「カトリック教会はプロテスタントが存在する1000年も前に、安息日を土曜日から日曜日に変更した」と書かれています。教会歴史を調べればそれが事実であることがわかります。またカトリック教会の教理問答は、聖書の安息日が土曜日であることを認めた上で、カトリック教会が教会の権威によってこれを変更し、日曜日にしたことを述べています。

聖書は「人間に従うよりは、神に従うべきである」（使徒行伝5章29節）と教えています。神が選んだ安息日と人間が選んだ日曜日、私たちはどちらを守るべきでしょうか。最終の時代において、これは神の民に対する忠誠の試金石となります。

## 瞑想のことば

神は、7日目に休まれたあとで、その日を聖別し、人間の休みの日とされた。人間は、創造主の模範にならって、この聖なる日に休むことになった。それは、人間が天と地をながめて、神の偉大な創造のみわざを瞑想し、神の知恵と恵みの証拠を見て、創造主に対する愛と畏敬の念に満たされるためである。

神は、エデンにおいて、第7日を祝福して、創造のみわざの記念となさった。安息日は、全人類の父であり、代表であるアダムにゆだねられた。その遵守は、地に住むすべてのものが、神を創造主とし、自分たちの正当な統治者として認めたことをあらわし、自分たちが神のみ手のわざであり、その權威に従うことを快く認める行為ともならなければならなかった。こうして、この制度は全く記念のために、全人類に与えられたのである。そこには、あいまいな点はなく、ある特定の民だけにかぎられることもなかった。

神は、安息日が、樂園においてさえ人類に欠くことのできないものであることをお認めになった。人間は、第7日に自分の興味や楽しみを捨て、神のみわざについて熟考し、神の力と恵みを瞑想する必要があった。人間はさらに明瞭に神のことを思い起こし、自分のものとして所有するすべてのものが、創造主の恵み深いみ手から来たことを思って感謝するために、安息日が必要であった。

神は、人々が安息日に、神の創造のみわざについて瞑想することを望まれた。自然は、彼らの知覚に訴え、生きた神、創造主、万物の最高の支配者の存在を宣言している。「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざをしめす。この日は言葉をかの日につたえ、この夜は知識をかの夜につげる」(詩篇 19 篇 1、2 節)。地上をおおっている美は、神の愛のしるしである。われわれは、それを万古不易の山、壮大な樹木、開くつばみ、優美な花に見ることができる。万物は、神について語っている。万物の創造主を指示している安息日は、自然という偉大な書物を開き、そして、そのなかに創造主の知恵と力と愛を探究するように命じる。

続きは、『明日への希望』(エレン・ホワイト著、福音社)に収録されている『人類のあけぼの』の2章をお読みください。



聖書の視点で歴史を見直すとき、  
今をどう生きるかを学び、  
明日への希望を見いだします。

#### 明日への希望

エレン・G・ホワイト著

A5判／1,984頁

収録されている本——人類のあけぼの(上・下)、国と指導者(上・下)、  
各時代の希望(上・中・下)、患難から栄光へ(上・下)、各時代の大争闘  
(上・下)、キリストの実物教訓、キリストへの道、祝福の山。



#### キリストへの道(改訂第3版文庫判)

エレン・G・ホワイト著

文庫判／184頁

手軽に読めます！

#### 各時代の希望

エレン・G・ホワイト著

3巻セット

文庫判／上巻496頁、中巻512頁、下巻504頁



聖書のことは、

わたしたちを励まし、助け、希望へと導く宝です

#### みことば手帳

手帳サイズ(横91mm×縦156mm)／192頁



#### みことば手帳2 全員参加伝道編

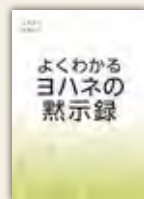
手帳サイズ(横91mm×縦156mm)／176頁

聖書を直接学ぼう！

#### よくわかるヨハネの黙示録

金棋坤著 柳鐘鉉訳

A5判／200頁



発行：福音社

福音社のオンラインショップ <https://www.fukuinsha.com>

表紙写真metha/PIXTA

VOPバイブルスクール 真理への道講座

第16課 安息日

2017年12月15日 初版第1刷発行 2022年7月15日 初版第3刷発行

〒241-8501 横浜市旭区上川井町846 045-921-1416(電話) 045-921-2319(Fax)

本書を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

本書は、『真理への道』(山形俊夫著、福音社、1962年発行改訂版)を底本として、聖書通信講座用に編集しました。

本文中の聖句で特記していない箇所は日本聖書協会発行『口語訳聖書』を使用しています。

1000P

## 真理への道講座

- 第 1 課 人生の謎
- 第 2 課 目に見えない世界
- 第 3 課 解決の鍵、聖書
- 第 4 課 世界と生命の起源
- 第 5 課 神
- 第 6 課 人生を暗くするもの
- 第 7 課 イエスの生涯
- 第 8 課 放蕩息子
- 第 9 課 だれでも新しく生まれなければ
- 第 10 課 足りない一つのもの
- 第 11 課 人生の苦難
- 第 12 課 主にゆだねた生活
- 第 13 課 聖書の歴史観
- 第 14 課 世界の将来
- 第 15 課 終末は近いか
- 第 16 課 安息日
- 第 17 課 死の彼方
- 第 18 課 使命を持つ教会